

# 青森県の林業

平内町土屋小 其 田 靖 生

## 1. 青森県林業の特徴

森林王国「日本」と言われ、緑の美しい水の美味しい国と世界の人々から羨望の眼差しで見られていた日本。

それが戦争中の乱伐と手入れ不足，戦後の復興材供給，それに続く高度経済成長における木材需要の激増と材価の高騰から大增伐され，また外材輸入，安い林業という政治の方向から資源状態は極度に悪化し，日本中，いたる所に荒廃を招いた。その結果，国民1人当たりの森林面積は0.2ヘクタールで世界で最も少ない国の一つになってしまった。

表1 主な国の国民の1人当たりの森林面積

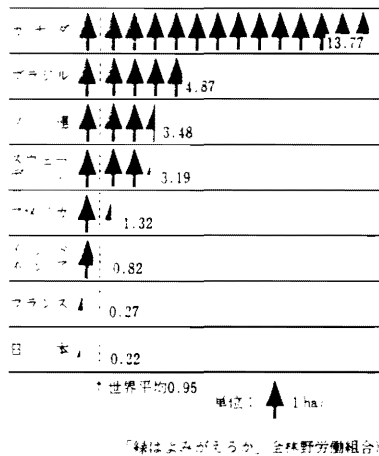


表2 青森県の素材生産量 (単位:  $m^3$ )

|      | 総 数       | 国 有 林   | 民 有 林   |
|------|-----------|---------|---------|
| 48 年 | 1,386,414 | 876,084 | 510,330 |
| 49 年 | 1,175,423 | 772,791 | 402,632 |
| 50 年 | 1,136,309 | 741,546 | 394,763 |
| 51 年 | 1,334,060 | 833,155 | 500,905 |
| 52 年 | 1,185,443 | 826,598 | 358,845 |
| 53 年 | 1,177,141 | 831,505 | 345,636 |
| 54 年 | 1,193,662 | 828,683 | 364,979 |
| 55 年 | 1,099,512 | 710,981 | 388,531 |
| 56 年 | 1,005,360 | 699,991 | 305,369 |

「青森県の林業」より

県の名前に「青い森」とつけている青森県。かつて日本三大美林の一つに数えられた「ひば」の美林を豊富に所有していた青森県の林業は，今どのようなになっているのだろうか。青森県の総面積は，961,563ヘクタールで，そのうち森林面積は68%，648,689ヘクタールである。この森林面積の所有形態は，全国的には民有林が主体であるが，青森県の場合は全国の傾向とは逆に，国有林中心の所有形態になっているのが大きな特徴である。

県内の民有林は，三戸・上北郡地方に主として分布し，かなり大きな地主も存在する。国有林は主として下北・津軽半島と秋田県境に広く分布している。これらの地区では，国有林の中にわずかに民有林が点在する状態で民家の軒先まで国有林という地域も数多く存在する。

国有林は，実に，総森林面積の62%，400,986ヘクタールにおよんでいる。残り38%，247,703ヘクタールが民有林として活用されている。ちなみに，全国の森林面積に占める国有林の比

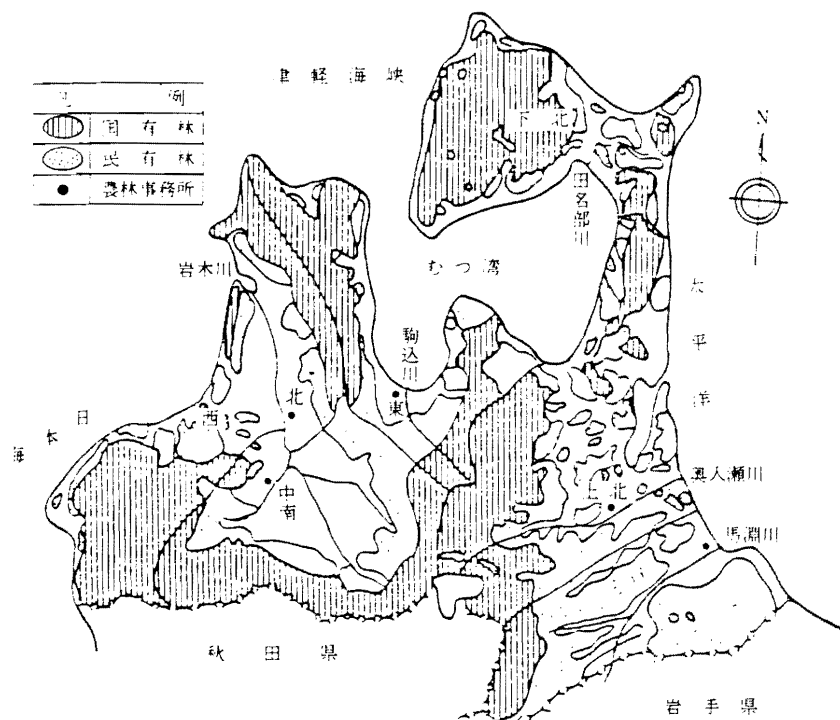


図1 青森県森林分布図

率は30%と低く、大部分70%は民有林である。

次に、青森県の森林の樹種についてみる。

三大美林の一つ「青森ひば」は現在、全体の19%、13,825千 $m^3$ にすぎなく年々減少の方向にある。その理由の一つに成長率が悪いということで植林が進んでいないからである。

県内の森林蓄積は、国有林49,471千 $m^3$ 、民有林21,606千 $m^3$ で1ヘクタール当りの蓄積は、それぞれ123 $m^3$ と87 $m^3$ であるが、その構成状況は全く対称的で、民有林は針葉樹の人工林率が高く、幼令林が多い。国有林は、天然生林の大径木広葉樹で成長の緩慢な老令林が多く、その伐採が計画され実行されている。

青森県平内町の国有林には大径木広葉樹の「ブナとひば」の混交林が数多くあるが、最近、この混交林のブナの伐採が目立っている。「ブナとひば」の混交林の保水量は抜群で山に降った雨の60%は保水すると言われる。「ブナとひば」の混交林が治山、治水の面から大切な役割を果しているのは明瞭である。

表3 森林面積

| 区 分     | 全 国       |      | 青 森 県      |      |
|---------|-----------|------|------------|------|
|         | 面 積       | 比 率  | 面 積        | 比 率  |
| 総 面 積   | 37,753千ha | 100% | 961,563 ha | 100% |
| 森 林 面 積 | 25,197    | 67   | 648,689    | 68   |
| 内 国 有 林 | 7,523     | —    | 400,986    | —    |
| 民 有 林   | 17,674    | —    | 247,703    | —    |

表 4 樹種別蓄積表

(昭和 57 年度 単位：蓄積 1,000 ㎥)

|       | 総 数    | 針 葉 樹  |        |       |       |        |                | 広 葉 樹  |        |        |                | 1 ha 当<br>蓄 積 |
|-------|--------|--------|--------|-------|-------|--------|----------------|--------|--------|--------|----------------|---------------|
|       |        | 総 数    | ス ギ    | マツ類   | カラ松   | ヒ バ    | そ の 他<br>針 葉 樹 | 総 数    | ナ ラ    | ブ ナ    | そ の 他<br>広 葉 樹 |               |
| 総 数   | 71,077 | 36,936 | 14,021 | 6,610 | 1,865 | 13,825 | 618            | 34,138 | 14,323 | 14,515 | 18,300         | 0.110         |
| 民 有 林 | 21,606 | 14,318 | 8,837  | 4,375 | 952   | —      | 154            | 7,288  | —      | —      | 7,288          | 0.087         |
| 官行造林  | 396    | 372    | 164    | 94    | 114   | —      | —              | 24     | —      | —      | 24             | 0.102         |
| 国 有 林 | 49,075 | 22,249 | 5,020  | 2,141 | 799   | 13,825 | 464            | 26,826 | 14,515 | 14,515 | 10,988         | 0.124         |

※ha当蓄積は林地分。国有林、官行造林は青森営林局調べ。

## 2. 荒廃する林業

次に、青森県の国有林における林業労働者の現状をみてみると、臨時行政改革調査委員会（以下「臨調」という）の答申以降、国有林野の労働者は、合理化の波にさらされ、国有林野での労働者の数はめっきり少なくなった。

特に昭和 40 年度、85,361 人いた職員が昭和 57 年度には、57,165 人とおよそ 3 万人も減った。林業就業者数は、全国で昭和 40 年度には、約 262,000 人いたが、昭和 55 年度には、177,000 人となんと 85,000 人以上も削減された。（図 2、図 3）

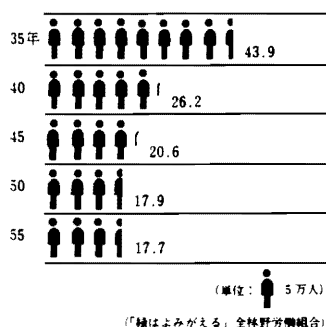


図 2 林業就業者数

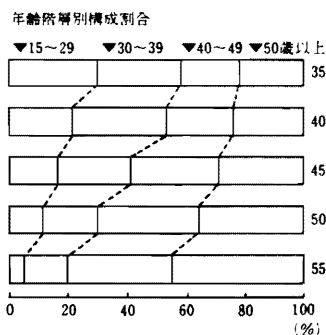


図 3 後つぎのいない林業労働者

特に、若い男性の比率は年々減少し、林業労働に占める女性の比重が大きくなってきた。この傾向は、青森県も同じである。女性がブルドーザーなどの大型機械を動かしたり、チェーンソーを使用する姿もめずらしくなくなった。

また、経営合理化政策のもと、国有林における地ごしらえ（これは、金のかかる作業であるが、植林を成功させるためにとても重要な作業である）、植えつけ、下刈りなどの作業はかつては、地元の農民が農閑期を利用し営林署の臨時作業員となり活動してきた。このことを通して農山村の人たちの農作業と山の仕事とががみあって生活がなりたち、地元と営林署とのつながりも密で、山林の管理も計画的に行なわれてきた。

それが、臨調の嵐の中で、基幹職員と呼ばれる新採用者は、年間全国で 100 人前後ときわめて少

なく、地元出身の定期作業員（常雇）や、臨時の作業員の雇用も年々、先細りの傾向である。そのため、伐採作業の8割、林道作りの7割は民間への請負いになってきた。臨調では、これらの作業は100%民間へ請負わせるという。

この結果、林業労働者の諸権利が民間への移行により、労働条件の後退をよぎなくされている。例えば、振動病（白ろう病）については、その原因とされるチェーンソー・ブッシュクリーナーの使用は営林局においては、一日一人二時間とされていたものが、民間が請負うことによってこの決まりが破られ、潜在的白ろう病が増えている。また、機械化による事故増発、薬剤散布等による薬害など、林業従事者を取りまく状況は年々厳しくなっている。

高度経済成長期、日本の森林は増伐による増伐でメチャメチャに破壊された。特にブルドーザーの導入によって林地の物理的破壊は、その速度を加速し、自然のしくみを狂わしている。北限のサルで有名な下北半島の山々では、空中からの薬剤散布（いわゆる枯葉剤の散布）で林地の化学的破壊が行われ世論の大きな批判を受けた。しかし、国有林では、現在も合理化の名もとと大手薬剤会社への関連を断ち切れず、全国で年間約30億円余の薬剤が使用されている。森林への薬剤散布の恐しさは、あのベトナム戦争後のベトナム人民の苦しみによって世界的にも知られている。

高度経済成長期の乱伐、増伐の後には、成長率の高い針葉樹の植林を中心に全国的に行われた。から松の植林はほとんどの地域で失敗に終わった。林地の環境を考慮しない一斉画一的植林事業は大いにみなおすべきである。その上、下刈り、間伐等に金をかけない植林計画は、山の将来を危うくしている。北国の冠雪害などによる被害は、ほとんどが植林計画のずさんさにある。必要木材は、外国から輸入すればよいという安易な発想から、昭和55年度の外国材輸入量は7,525万 $m^3$ 、同じ年の国内伐採量は4,293万 $m^3$ である。これは、国内木材供給量の50%に達する。最近では、70%にもものぼると言われている。青森県の外国材輸入量は年々少なくなっているが、それでも昭和56年度は、311,611 $m^3$ で県内の木材供給量の3分の1以上になっている。このような外国材輸入は、東南アジアを含め諸外国から日本政府の森林資源に対する姿勢が厳しく問われている。

林野庁で毎年出す最近の「林業白書」は、国民の財産である森林資源、国民の健康を保障する森林資源を守るという立場からの報告というよりは、いかに林業に手間と金をかけないで行うかという臨調の立場で書かれている。（図4）（表5）

表5 青森県の外材入荷量（単位： $m^3$ ）

|     | 青森港     | 八戸港     | 計       |
|-----|---------|---------|---------|
| 48年 | 209,010 | 348,166 | 557,176 |
| 49年 | 198,336 | 375,352 | 573,688 |
| 50年 | 222,764 | 333,956 | 556,720 |
| 51年 | 224,088 | 383,029 | 607,117 |
| 52年 | 177,151 | 353,812 | 530,963 |
| 53年 | 197,884 | 376,496 | 574,380 |
| 54年 | 166,591 | 399,683 | 566,274 |
| 55年 | 128,628 | 265,779 | 394,407 |
| 56年 | 88,938  | 222,673 | 311,611 |

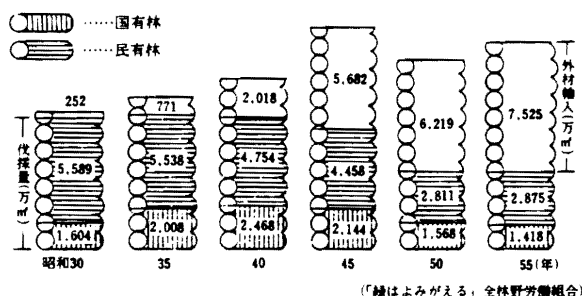


図4 全国の伐採量と外材入荷量

「青森県の林業」より

### 3. 会社有林が増加する平内町の林業

平内町は、県都青森市の東端に隣接する町で、総面積は、21,588ヘクタールである。北は夏泊半島が陸奥湾に突き出ており、南部に山岳地帯を擁し、奥羽山脈と連なっている。

森林面積は、16,996ヘクタール、78%と最も広いものの、住民の林業に対する依存度は低い。その森林経営面積は5ヘクタール以下が全体の86%、1,006戸で、ほとんど零細林家である。平内町の第一次産業に占める林業生産額は、昭和57年度、約8億円、16%と少なく低迷している。林業生産者は、農業や漁業との兼業（複合経営）がほとんどである。

民有林は、12,487ヘクタール、73%、国有林は、4,509ヘクタール、27%である。青森県の平均とは逆で全国平均に近く、国有林対民有林の比率は3対7である。民有林の内訳は、私有林が、12,247ヘクタール、98%、公有林が240ヘクタール、2%となっている。民有林の人工林は、4,710ヘクタール、38%である。（表6）（表7）

表6 平内町の森林面積  
（昭和57年度）

|           | 総面積<br>(ha) | 森林面積<br>(ha) | 耕地面積<br>(ha) |
|-----------|-------------|--------------|--------------|
| 実数        | 21,588      | 16,996       | 2,040        |
| 総面積に対する割合 | 100%        | 86%          | 9.4%         |

表7 平内町の規模別山林農家戸数  
（昭和57年度）

| ～5 ha<br>(以下) | 5 ha～<br>10 ha | 10 ha～<br>50 ha | 50 ha～<br>(以上) |
|---------------|----------------|-----------------|----------------|
| 1,006戸        | 98戸            | 55戸             | 5戸             |
| 86%           | 8%             | 4.6%            | 0.4%           |

平内町の山林の所有形態にも大きな変化があらわれている。会社の所有林が増加し、個人経営の民有林の減少ということである。小規模な個人経営では、農作業や勤務の関係で山林の維持管理にまで手がまわらず、手離すものが増加してきている。それを税金対策、資産の増加などをめざして、中央資本や、県内の大手会社や宗教団体が買収しつつある。すなわち、山林が平内町以外の企業などに買いとられていっているということである。（会社の所有林が2%から24%に増加している。）これらの会社は、国や県の補助を最大限に利用して、かなりきちんとした山林経営を行なっているといえる。（表8）

表8 平内町の民有林の所有形態別森林面積  
（単位：ha）

|    |      | 全森林面積  | 公有林    | 共有林 | 公造社林 | 公造団林 | 会有社林  | 社有社林 | 寺林     | その他民有林 | 官造行林 | 国有林   |
|----|------|--------|--------|-----|------|------|-------|------|--------|--------|------|-------|
| 昭和 | 45年度 | 17,134 | 12,615 | 772 | 70   | 28   | 319   | 18   | 11,198 | —      |      | 4,519 |
|    |      | ↓      | ↓      | ↓   | ↓    | ↓    | ↓     | ↓    | ↓      | ↓      |      | ↓     |
| 昭和 | 58年度 | 16,995 | 240    | 259 | 416  | 452  | 3,033 | 3    | 8,084  | —      |      | 4,508 |

国有林の管理経営はかなりずさんになっている。例えば、下刈りは、植林後6年間は、毎年行なわなければならないのだが、予算不足から3年位でやめてしまうために、から松などは下草にかまれてしまうということがあ（消えてしまう。）

このように最近の国有林は、手間と金をかけない林業経営になっているので、荒れが一段と目に

つくようになってきた。山は荒廃しつつあるのだ。(表9)

平内町の林業，青森県の林業が発展することを願ってやまない。

表9 林業の助成制度  
(昭和58年度)

|      | 補 助 率   | 実 質 補 助 |
|------|---|---------|
| 人工造林 | $\frac{4}{10}$ (国 $\frac{3}{10}$ 県 $\frac{1}{10}$ ) | 60%～32% |

【参 考 資 料】

「青森県の林業」(昭和58年度) ……県林政課

「国 有 林」 ……林 野 庁

「緑はよみがえる」 ……全林野労働組合

「平内町林業振興地域整備計画書」 ……平内町農林課

聞きとり協力者

全林野労働組合青森地本委員長 花 田 敏 夫 氏

平 内 町 角 井 信 男 氏